

## トピックス

## 第3回国際疫病・ピシウムワークショップ報告

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 東 條 元 昭

2008年8月23日と24日にイタリアのトリノ市で国際疫病・ピシウムワークショップが開催され、主催者の一人として参加した。このワークショップは2004年から2年おきに行われてきたもので、今回が3回目となる。米国農務省メリーランド州 Beltsville の Gloria Z. ABAD 博士(図-1)が今回までの3回すべてを主催している。前の2回はともに、ABAD氏が昨年まで所属していた米国ノースカロライナ州立大学の学生実験室で行われ、実習形式で参加者数を50名程度に限って行われてきた(前回の詳細は <http://www.cals.ncsu.edu/plantpath/activities/societies/stramen/index.html> で閲覧できる)。今回のワークショップは、翌日からトリノ市で開催された国際植物病理学会議2008に日程を合わせたため、講演中心の内容となった。そのため多くの研究者が参加し、事前の申込者が37か国から106名、当日参加10数名となり、疫病とピシウムに対する世界的な関心の高さがわかる結果となった。国別(人数)では、アルゼンチン(2)、オーストラリア(8)、オーストリア(1)、バングラデシュ(1)、ベルギー(7)、ブラジル(2)、ブルガリア(1)、カメルーン(1)、カナダ(5)、コロンビア(1)、チリ(1)、中国(3)、エジプト(2)、フランス(4)、グルジア(1)、ドイツ(4)、ガーナ(1)、ハンガリー(1)、インド(1)、インドネシア(1)、イタリア(7)、日本(4)、メキシコ(1)、オランダ(4)、ニュージーランド(2)、ナイジェリア(1)、ノルウェー(4)、オマーン(2)、プエルトリコ(1)、南アフリカ(2)、スペイン(7)、スイス(1)、台湾(1)、チュニジア(2)、英国(5)、米国(8)、ベネズエラ(1)であった。

このワークショップのプログラムは、国際植物病理学

会議2008のサイト ([http://www.icpp2008.org/workshops\\_det1.php](http://www.icpp2008.org/workshops_det1.php)) で見ることができる。講演内容は、分類、進化、新種提案、分子分類手法、発生生態、診断法など、伝統的手法から分子技術まで最新の内容が取り上げられた。オランダのCBS, Fungal Biodiversity CentreのArthur de Cock氏らによる、疫病とピシウムの中間に位置する新属“*Phytophythium*”の提案などが、参加者の関心を特に引いた。最新の情報をできるだけ多くの研究者と共有したいというABAD氏の意向と、各講演者の理解もあり、講演終了時には全講演のパワーポイントファイルのPDFが、ワークショップの参加者全員に配られた。

このPDFは、後日ABAD氏のHP ([http://www.aphis.usda.gov/plant\\_health/identification/phytophthora/index.shtml](http://www.aphis.usda.gov/plant_health/identification/phytophthora/index.shtml)) で公開される予定であるが、急いで入手されたい方は、筆者までお問い合わせ下さい。

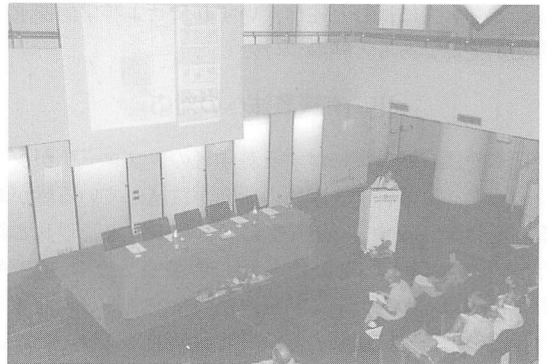


図-1 講演する主催者のABAD氏